

非文末上昇イントネーションの現れる言語環境とその心理的基盤

木下恭子(京都大学大学院)

1. はじめに

ここ数年、文中での上昇イントネーションの使用が急速に広まってきている。このイントネーションは「疑似疑問イントネーション」「半クエスチョン」「半疑問」などと呼ばれ、その言い方が適当かどうか自信がない時や、その判断をあえて相手にゆだねる時に使われる(郡 1997)、「私の話していることが伝わっていますか」という信号として使われており、相手に伝わっているかどうか不安になる原因の1つには、自分の使っている単語・言い回しが難しすぎるのではないかと、気にしていることがあげられる(NHK放送文化研究所)などの指摘がある。

本研究では共起する表現や構文、文脈といった上昇イントネーションの出現する言語環境を調査する。これにより、相手に伝わっているかどうかの不安は先行研究で述べられているような言い回しが難しすぎるとか言い方が適当でないとかという場合だけではないこと、また、上昇イントネーションが用いられるのは相手に伝わっているかどうか不安な場合だけではないことを明らかにする。さらに上昇イントネーションが非文末においてなぜこれらの用法を生じたのか考察する。

2. 非文末上昇イントネーションの出現位置

先行研究で、報告されている例はすべて助詞や助動詞の前で上昇している。

- (1) 形状記憶繊維↑で作ったシャツって、シワにならないんだって。(郡 1997)
- (2) 確認↑みたいな(井上 1997)

しかし、筆者の1996年以降の調査では、助詞や助動詞の後でも上昇が起きている¹。

¹ 上昇イントネーションは単語末つまり助詞の前で起こるより、文節末つまり助詞のあとで起こる方が日本語の既存の構造により適合している。したがって先行研究と本研究の観察事実の違いは、言語の経年変化に

(3) で、適度なスパイス香が↑すぐにお肉の香り引き立てるんです。(ワイン8)

(4) 3年になってからずうっと日記みたいなもんを書いてたんですね。何かこう、ま、ストレス発散みたいな↑そんな感じの↑。(10代)

また、上昇イントネーションが起これる所で文が終わっているものもある。

(5) A: まあ、まず、かおりちゃんだったらどうする? こういう場合。

B: そのまんま↑ (文化)

(6) あたしもう休日ほとんどないんですよ。で、あの、ただま犬を散歩に連れて行く↑ほとんどパンツとTシャツと、その上にセーターを着ると。そういう格好ですね。(パーク)

これらは助動詞や助詞を取らず、また従来ならばこのような場所の上昇イントネーションは疑問として解釈されるところだが、これらは疑問文ではない。

本研究では以上のものをすべて非文末上昇イントネーションとして扱う。

3. 非文末上昇イントネーションの出現環境

3. 1. 不十分な表現

上昇イントネーションは不適切な表現や不十分な表現、未熟な表現など、相手に確実に理解してもらうことが難しい表現の部分で現れる。

[話し手が作った表現]

(4) A: 橋爪さんにとっては意外と珍しいミスでしたよね。

よるものとも考えられる。しかし現段階では年をさかのぼった調査はしておらず、本研究では現時点の観察事実を述べるにとどめる。

B: そうですね。

A: 今のは特に攻撃してるわけでもありませんから、

B: はい。

A: 続けてるボール↑。こうゆうミスがなかなかないんですから(マ)、佐藤さん、これを活かしてもらいたいですね。

(レッツ)

[例示・類似表現]

(8) 砒素と言われて、神経に来るとか、胎児はわからないとか↑、そんなこと言われたら、不安。(新サ)

(9) なんか、救われたような↑ (パラ)

[言い直し]

(10) たぶんですね、パローロというのは、世界で一番長寿の↑長期熟成形の↑ワインかもしれないですね。(ワイン3)

(11) A: 画家の夢はどうなっちゃったんですか。

B: それはちよつとこう横に行ってしまったんですよ。だけどまあ今ねあたしあのう展覧会↑あのう、ま、衣装を含めての展覧会もやっておりますし、(パーク)

(12) A: うん。車をすごい、彼女みたいに大事にしてるんですよ。

B: 奥様より?

A: ですね。

B: ええ!

A: すごい、もう細かい傷もチェック↑、ですね、チェックしてるから。(見れば)

これらは表現に迷ったり、表現の適切さに問題があるなど、話し手の言いたいことと表現との間にずれがあるか、または話し手のイメージが適切に聞き手に伝わるかどうか確かでないと言え、そのことが上昇イントネーション出現の要因になっていると考えられる。

3. 2. 構文修正

上昇イントネーションの出現箇所では、どのような構文を取るかの計画が不十分で、構文の修正を伴

うことがある。

(13) あたしも、こつちもなんか、もらい泣きみたいにしそうになったんだけど、先生の奥さん↑あたし、奥さんにも結構すごいかわいがってくれたっていうか。で、ゆったらしいんですよ、こないだ、来るんだとかって。奥さんはなんか泣いてたってゆってて、そういう話聞いた時ものすごいジーンと来ちゃったんだけど、なんか泣いても、二人でぼろぼろ泣いてもあれかなと思って。(知ら)

(14) 例えばなんかおいしいお醤油、例えば九州で使ってるようなちよつと甘目の濃いお醤油がありますよね、熟成した。ああいうようなやつだと、たとえばイカの握り↑イカの握りなんか絶対白ワインみたいな感じでですけど、日本酒でもいいですけど、でもメルローを合わせる時にああいう醤油をちよつとこう塗った↑塗って食べると、メルローと合っちゃうんですよ。(ワイン5)

(13) では、とりあえず言いたいことの核になる言葉「先生の奥さん」を言ってしまつて、それから新たに文を組み立てている。(14)は連体修飾を連用修飾に変更している。これらは句自体の意味の伝達に問題はないが、その句が文の中にどのように組み込まれるのか計画されていない。

3. 3. 情報の補足

後置された補足説明の部分で上昇イントネーションが起こる。

(15) この商品は、ご年配の方にもお勧めしてるんですよ、A証券では↑。(生1)

(16) で、先にお金もらってしまったから、なんぼやった2万かそのくらいもらって携帯高いから、で、もらってしまったから、その分の↑何日間っていう紙を自分で作つて、1から30まで↑日めくりカレンダーみたいに↑で、1日行ったらその分だけ数字を破つていくつて言うか、抜いていつて、(10代)

これらは補足前には不十分な理解しかえられていないものについて、その不十分な理解を改善しようとしている部分である。

3. 4. 情報の活性化

先行文脈からは想起しにくい表現のところで上昇イントネーションが現れる。

- (17) でです、今度は醤油なんです、お醤油をかけた時に今度はオレゴンとモレ・サン・ドニ²↑をちょっと召し上がってみてください。(ワイン1)

(17)は、いくつかのワインを飲み比べるという状況で、オレゴンとモレ・サン・ドニはすでに紹介されている。したがってモレ・サン・ドニという言葉は聞き手に理解される言葉である。しかし発話の直前の部分では、オレゴンについて説明していて、モレ・サン・ドニに注意が向いていない。この時点でモレ・サン・ドニの活性度は低く、下線部で発話することで活性化している。

3. 5. 主張

質問に対する答え、説明のキーワード部分など、自分の主張を述べる部分で上昇イントネーションが現れる。

[質問に対する答え]

- (18) A : というわけでね、藤田君の夏のエピソードってことで、もう、大人になってからの過ごし方っていうのはあるけど、子供の頃、何してたかな。
B : や、うち、あんまり旅行とかしない家族だったんで、
A : うん。
B : 来る日も来る日も野球してた様な気がするんですけどね。
A : 野球ですか。
B : ええ。ま、高校くらいになれば、来る日も来る日もバンド↑ (ジル)

² オレゴン、モレ・サン・ドニは、ワインの種類。

- (19) A : 幸せだなと思うのはどんな時ですか。

B : 今はあの、ちっちゃな、うちで生まれたあの猫 (の)、あたし、孫って呼んでますけど、子猫と一緒にいる時間↑。だけれども例えばほんとにずっとオーロラを見に行きたいと思って、で、オーロラのあの真下にダーンとひっくり返ってもうほんとにぼろぼろと氷の涙を(流して)
(スタ)

[説明のキーワード]

- (20) 店員 : このねスカート、こういった、前も着てるんですけどもね、ハンドニットのセーターとかと合わせて、優しい感じで着ていただいたらねえ、すごくオシャレ↑。これちょっとセーターじゃなくてカーディガンになっちゃうんですけど。あとね、これと意外とね、こういったジャケット↑とか合わせてみたり、うちするんですよ。

客 : 柄物でも。

店員 : んん。割とねえ、あの、お客さんのほうがびっくりされるような、こう、あわせかたしても、しっくりいくんですよねえ、うちのほうは↑。あと、ここらへんでしたら、今のグレー↑今結構グレー出てますよね。その色の的には合わせるのにここらへんの色↑茶系も入ってますので、暗いわけじゃないですから。すごくきれいですよ、これ。

客 : んん。

店員 : この形↑ (生2)

(20)は店員が客に商品をすすめている場面だが、すすめるもの、色、形、そしてそれが「おしゃれ」であるといった商品売り込みのキーワードの部分で上昇イントネーションが生じている。

(18)～(20)のいずれも自信を持って話しており、また、用いていることばは難しくない。したがって先行研究のように上昇イントネーションは自信がない時、難しい言葉を用いる時に生じるという捉え方では不十分である。

4. 上昇イントネーション使用の心理

以上の観察から明らかなように、非文末上昇イントネーションが現れるのはその言い方が適当かどうか自信がないとか自分の話していることが相手に伝わっているかどうか不安な時ばかりではない。

「自信がない」「不安だ」という分析は文末の上昇イントネーションが疑問文に現れるというところから来ているように思われる。しかし従来の文末に現れる上昇イントネーションも、疑問の時だけに用いられるわけではなく、確認(22)や一時的に情報を与える時(23)にも用いられる。

- (21) 行く↑?
- (22) 行くね↑。
- (23) 行くよ↑。

このように上昇イントネーションは相手に働きかける時に用いられる(天沼他 1978)が、このことは非文末においても同様である。

非文末において上昇イントネーションが用いられるのは3章で見たように①句の意味や、句の文の中への組み込まれ方に問題があるとき(不十分な意味、構文修正)、②相手の理解が十分でないことが予想され、それを補おうとする時(情報の補足、情報の活性化)、③自分の主張を理解させようとする時(主張)であり、相手に働きかけ、相手の理解を促していると言える。

上昇イントネーションが文末に現れる場合と非文末に現れる場合の違いは、文末の上昇イントネーションが文を単位とする情報に関わるのに対し、非文末上昇イントネーションは文よりも小さい単位に関わるということである。

5. まとめ

非文末上昇イントネーションは言い方が適当かどうか自信がない時だけではなく、情報を補ったり主張したりする時にも用いられる。これは本来上昇イントネーションが相手への働きかけを表すことから生ずるものである。

なお、先行研究と本研究との観察事実の違いは観察時点の違いによるものであることも考えられるが、発表者は年をさかのぼっての調査は行っていない

ため、今回は現時点での観察事実を提示するにとどめた。

参考文献

- 天沼寧 他(1978)『日本語音声学』くろしお出版
井上史雄(1997)「イントネーションの社会性」杉藤美代子(監修) 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編)『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂(東京)pp. 143-168
井原圭子(1994)「気分は半クエスチョン」『アエラ 1994年7月4日号』pp. 58-59
NHK放送文化研究所「ことばQ&A」(<http://www.nhk.or.jp/bunken/jp/b3398-j.html#811>)
郡史郎(1997)「日本語のイントネーション 一型と機能一」杉藤美代子(監修) 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編)『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂(東京)pp. 169-202

用例の出典

- (ジル)「ジルのレディオ・ニュー・センセーション」FM東京 1996. 8. 6
(パラ)「ラジオ・パラダイス」FM東京 1996. 8. 7
(文化)文化放送 1996. 8. 7
(生1)生録音 1996. 8
(ワイン1~8)「趣味悠々：田崎真也とみづける自己流ワインの楽しみ(1)~(8)」NHK教育 1998. 4~5
(見れば)「見ればなっとく」1998. 8. 23
(レッツ)「レッツ・エンジョイ・テニス」NHK教育 1998. 8. 24
(新サ)「新サンデーモーニング」1998. 8. 30
(スタ)「スタジオ・パークからこんにちは」NHK総合 1998. 9. 10
(知ら)「知らばかトーク」関西テレビ 1998. 9. 11
(生2)生録音 1998. 10. 23
(10代)「少年少女プロジェクト特集 ききたい! 10代の言い分 ~不登校編~」NHK教育 1998. 11
(パーク)「スタジオ・パークからこんにちは」NHK総合 1998. 12. 11